最初の「はじめに」
～研究所長就任にあたって～

遠藤　斗志也

2020 年 4 月から，永田和宏前所長に代わり，私こと遠藤が京都産業大学のタンパク質動態研究所の所長を務めることになりました。また 2020 年 4 月から，潮田亮准教授が研究所のメンバーになるとともに，本研究所の評価助言をいただく招聘教授に新たに Nikolaus Pfanner 教授（独フライブルグ大学），森和俊教授（京都大学），嶋田一夫教授（理化学研究所）をお迎えしました。この新体制は 2020 年度からですが，今回お届けするのは昨年度，2019 年度の本研究所の活動をまとめた年報となります。

本学の研究所は 3 年で 1 期ですので，2016 年に発足した当研究所にとって 2019 年度は 2 期目の最初の年でした。発足時に掲げた本研究所の研究方針に鍵となる三つの軸，すなわちタンパク質の一生という時間軸，タンパク質が細胞内で働く場という空間軸，そして組織化（分子間相互作用），これらの重要性が現在ますます高まり，認識されつつあります。背景としてはこの数年で飛躍的に進展したクライオ電子顕微鏡を用いた構造解析技術があり，2019 年度も本研究所からクライオ電子顕微鏡を用いたインパクトのある研究成果がいくつも論文発表されました。一方で顕微技術の発展や網羅的な解析手法の発展により，タンパク質が働く場である細胞の中で，タンパク質が生まれて，移動して，様々な分子と相互作用し，そして分解されというタンパク質の機能を俯瞰する視点からの理解も進みつつあります。これについても，インパクトのある成果が本研究所から続々と出ています。本研究所がまさしく現在のタンパク質科学の最前線を先導する研究拠点として活動できていることの証左かと言えます。

今回，永田前所長，招聘教授の嶋田一夫先生，そして私で，オンライン鼎談というか放談を行い，タンパク質科学研究の最新の動向も含めて，自身と研究との関わり，研究所をとりまく様々な問題，そして若い人たちへのメッセージなど，多岐にわたる話題をとりあげてディスカッションしました。その内容を本年報に収録いたしました。3 人の個性が出て，読み応えのあるものになったかと思います。お楽しみください。

本研究所のもう一つの重要な使命は，本学の学生を，研究を通じてインスパイアし，一般市民の方々との交流を通じて本研究所のファンになっていただくことです。そのために，2019 年度は「ようこそタンパク質の不思議な世界へ」と題して，3 回の一般市民向け講演会シリーズを行いました。これについては永田前所長が巻頭言で書かれているとおりです。ちょうどこのシリーズの 3 回目が終わったところで COVID-19 の広がりが無視できなくなり，大学を取り囲む環境も含めて社会が大きく変容せざるを得なくなりました。そのため，2020 年度も何らかの形でこうした一般社会へのアウトリーチを考えていた本研究所も，軌道修正を余儀なくされたところです。

最後になりましたが、本研究所では急速に変容する大学を取り囲む環境を見ながら，研究に留まらず，本研究所として新たな活動を模索していきたいと考えています。皆さまのご支援とご協力を賜りたいしだいであります。

（2020 年 11 月）